沖繩から伝えたい平和の想い

那覇市立寄宮中学校三年 城間 奏乃

戦後八十年。節目となる今年五月、私は初めて沖繩平和祈念公園に足を踏み入れた。小学校で行くはずだった遠足の場所がコロナ禍で変更され、中学三年の今まで一度も訪れたことがなかった。私は沖繩に生まれ育ち、毎年この時期になると授業で平和を学び、慰霊の日には沖繩戦と平和を考える。

二十万人の名前が刻まれた礎のある場所なのだから、しみりりとしていて命の重みをかんじる場所なのだろうか。そんな印象を頭に浮かべ、車を降りた。私の目の前に広がっていたのは夏の到来を感じさせる太陽、穏やかな風に揺れる木々、澄み渡る美しい青空、五月上旬、公園は色鮮やかなこいのぼりが揺れ、子どもたちが駆け回り連休を楽しむ家族でいっぱいだった。本当にこの場所が沖繩戦最後の激戦地であり、大勢の人を死に追いやった摩文仁なのだろうか。目の前に広がっている平和な光景に八十年前の姿を疑いながら私は資料館に向かった。

資料館は外の平和と一線を画し、私に大きな衝撃をもたらした。メガネ、着物、水筒、おびただしい数の遺留品が持ち主の人生を象徴していた。持ち主はどんな人だったのか、どんな夢を抱いていたのか一人一人の命の重み、人生の価値が見えてくる。ガラス越しに見える外の世界が違って見えた。八十年前の今日、梅雨の前に蒸し暑さの中、逃げまどい恐怖におびえる人々で溢れていたに違いない。その時も今日のように青空が空一面に広がっていたのだろうか。様々な感情に心が揺さぶられる中、今回の目的の一つである祖父の兄の名を探した。検索システムでは名前と生年月日、住所、加えて死亡日と死亡場所まで調べることができた。私が初めて目にするその情報はこれまで一番、沖繩戦を身近に感じた瞬間となった。

フィリピンのパラオ島アルモ。その場所に私は想いを馳せる。私の祖父は戦争を語らない。戦死した兄のことも語らない。祖母の話によると、食料を取りに海に出たところだったという。生きるために海に向かった祖父の兄。仲間のためだったのだろうか。最後の瞬間、何を想ったのだろうか。兄の死を当時の祖父や家族はどう受け止めたのか。祖父はなぜ語らないのだろうか……。

想像することしかできないけれど、これだけは確かだ。彼は生きるために決死の覚悟で海に出たこと、国のために命をかけたこと、祖父の兄と同じように当時の多くの男性が異郷の地で戦ったこと、十代を含む少年少女までもが劣悪な環境で兵士の看護や補助に当たったこと、帰りを待つ多くの家族が胸を痛めたこと。戦争が二十万人もの人々の明日と希望を消し去ったこと。戦争というものを繰り返してはいけないこと。戦争はこの世で最も無意味で、多くの人を苦しめ、誰も幸せにしないこと。戦争は繰り返してはいけない人間の過ちであること。

しかし、世界から戦争は無くなっていない。これほどの残酷な歴史があっても。くり返してはいけない人間の過ちだと分かっているはずなのに。今も世界では戦争も紛争も繰り返されている。世界から戦争が無くならない。

私はこの沖繩戦がもたらした残酷な事実と歴史を忘れない。戦没者に祈りを捧げ続ける。平和を願い、戦争の愚かさを理解する人が少しでも増えれば、少しずつ世界は平和になっていくと思う。戦没者の人々の死を私は絶対無駄にはさせない。だから私たちはもっと行動を起こしていかなければならないと思う。

「戦争は起こらない。」そんな言葉を耳にすることがある。本当だろうか。起こらない保証がどこにあるというのか。「だって戦争はいけない。」「戦争なんてそんな馬鹿なこと起こるはずがない。」本当だろうか。

毎年やってくるこの時期。沖繩戦と平和を考える私たち。当時の四人に一人が犠牲になったという沖繩戦。この地に生きる私たちは親戚に犠牲者がいる人が多い。沖繩戦を学び悲惨さを知っているからこそ「あんな愚かな戦争なんか起こらない」と思ってしまう。その考えこそが油断だ。沖繩だけではない、先の大戦で敗戦し日本は戦争の愚かさを学び皆が胸を痛めたはずだ。誰もが戦争はいけないことを知っている。それなのに人々の危機感がかつて無いほどに薄れているのではないか。

摩文仁の丘には、国籍を問わず、すべての戦没者が眠っている。その方々一人一人の人生を今一度思ってみよう。平和が続くと思っただけではない。戦争なんて起こらない。その考えを当たり前だと油断せず、沖繩戦を見つめよう。私たちの行動が後世を作るのだ。平和な世の中を作るのは、国を動かす偉い人たちではない。私たち自身なのである。今年も私は沖繩から平和を訴える。